

目次

004	春がおそろしくって、もう嫌になってしまいそうなんです
012	自分が今どれぐらい大きな声を出せるのか試したい
020	私は青春を見つけるのがすごくまいんです
026	青春ばかり追いかけている青春人間だと思えます
034	忘れると簡単に自分から消えてしまう種類の興奮じゃないでしょうか
042	ガンガンのほって行ってしまういそうになるんです
050	とにかく細かく尊重し肯定するしかないなと思います
058	時間について考える時間をもっと欲しい
068	なにもかも誰より一番慣れないように生きていました
076	意図したようにならないということが面白くて仕方ない
086	芸術がとてつもなく広義であることに最近あらためて癒されています
096	「賢沢な悩み、上等！」と言いたいんです
108	一人でいることは、私は結構得意です
114	ギャル的なものを自分の中にいつも持つておけるように
122	驚くことになんともはや彼らが私の中にいるんですよ
130	どれをどの比率で混ぜるかというミックス具合だけ
138	どうしたってかぶりようがない、本物の無限
146	弱い音が、弱さゆえに最大の効果を生む
154	愛し合うことなく人が集まって、毎日会ってすごい
162	気を遣われることによって、なぜか元気が消えて
170	私は子どもの頃から、新しい刺激をできるだけ受けたくない気質なんです
178	好きな作品でも、さっさと終わってそこから解放されたい
188	今日、ジャムが枯れました
198	自分の頭の中からはまったく生まれない行き先
206	新しいことはできるだけ知りたくない、混乱したくないのかもしれないです
214	よれよれになった心が少ししゃんとした
224	いつだって、故郷の緑を祈りたいです
234	胸を張って言える感じが自分の中にずっとない
244	傷つきの記憶と取り返しのがかなさについてはとしたことがあって、聞いて下さい
254	文通で名前が上がった作品たち

春がおそろしくって、もう嫌になってしまいそうなんです

2024年3月13日

こんにちは。古賀です！

春がおそろしくって、もう嫌になってしまいそうなんです。

ぬるまって温かい日が増えました、近所の公民館の前に梅と桜の木が植わっておりまして、梅が咲いたら桜も咲きました。早咲きの品種だそうです。

風が、もはや肌に冷たくありません。吹かれてもぜんぜん痛くない。泡で包むみたいにやわらかくて湿り気があって、優しさに困惑します。

家を出て外に漏れだすのはぜんぶ笑顔のように見えます。子どもたちが薄着で走っていく、通勤通学でしょう、駅へ向かう人たちの足さばきも軽快、散歩の犬も上機嫌

で、郵便配達のバイクすらも陽気に見えます。

もちろんどんな季節も人は悩んでいて、だれもが春で浮かれているわけではありません。戦争は終わらないし、自然災害でしんどい思いをしている方々もたくさんいます。子どもにとって進級や進学のお会にふれる春はいちばん不安な時期でしょう、年度がわりで大人も翻弄されがちです。飼い犬も人をケアするのに大忙しで疲れているかもしれません。郵便配達なんていよいよ仕事でばんばんですよねきつと。

でもなかのん気で幸せで陽気な顔をした春があつて、そこに人がいて、私は「おいー」と自分を呼び止めてしまおうのです。

「大丈夫か?!」って思います。

そもそも、春が人を狂わせることはよく知られていますね。なにしろ桜ですよ。文学の世界では桜は古くからずっと畏れられています。うれしく美しく、そしてあんなに怖いものはない。

これから桜がふわふわ玉のように咲いて、吹く風に花びらがひらひら混じると思うとぞっとします。

さみしい。

これは急いで誰かと繋がらねばと、シカク出版のたけしげさんにご相談したところ、ナオさんとの往復書簡のアイディアが出たのでした。

偶然にも私たちは1979年の早生まれ勢です。それなりに大人である40代半ばの同世代の仲間同士、漠然と不安を、分かち合いながらやりとりさせてもらえたら、とても助かります。

さて、先月2月11日はあらためてありがとうございました。私の日記本とエッセイ集がまさか同時刊行になったということで、記念イベントにご登壇いただきまして、本を読み込んであれこれ準備してくださり、とても嬉しく恐縮しました。

会場入りする前にポッキーを買いに行かせてすみません。ポッキーってめちゃくちゃおいしいですね。へんな名前だし。

ナオさんとは以前から、大人たちが恋の話を遠慮しすぎているのではないかとやりとりしていましたね。

最近娘が少女漫画が原作のアニメを立て続けに観ており（ちょっと古いけど『俺物

語!!』と『君に届け』を観ていました）、内容があまりに恋愛要素で満ちあふれており声が出ました。

かつて少女だった私にも恋でしかない日々があったかどうかというと、もうちょっと現実として恋寄りでない青春を送ったように記憶しているのですが、あれくらい純度高く恋愛だけを扱ったカルチャーがあるからには、何歳だってすっかり恋と無縁になるのはやっぱり難しいと思います。

それで、私の出したエッセイ集に恋のエピソードがいくつかあったことから、イベントタイトルを思い切って「人よ、もっと恋のはなしをしよう」にさせてもらいました。あらためて恋という現象が人生と情感に深く与える影響を、ナオさんや司会に入ってくださったたけしげさんと語り合えてとてもおもしろかったです。

イベントで再確認できたのは、大人があきらかに恋を軽んじている、ということだったと思います。

歳を重ねることで、婚姻等によって人生におけるパートナーが確定し、出会いや別れという激しい恋のトピックから離れる人が多いからという理由はもちろん推察でき

ます。

それでも、恋による過去の幸福や傷は一生かかえてすぐすわけですし、そもそもパートナーのそばに続けるというのも、恋らしいことではないでしょうか。

で、そう思ったときに、同じように、大人だから軽んじている情感って、恋以外にもたくさんあるなど、はっとしたんです。

大人になって我慢する、大人の事情で融通する、大人として振る舞うためにアンパランスに都合を優先する。

そもそも「大人」ということばが内包する、我慢、事情、都合の量ってすごいですね。発動されない蓋ふたをされた感情が言葉そのものにばんばんつまっています。

らしさからの解放がさげばれて久しいです。女らしさ、男らしさからの脱却はもちろん、エイジズムも今や広く意識されるようになってきました。

そんななかで、大人が大人らしくあることについてはなお、私をきゅつと縛っているように感じます。

背景として、大人には子どもを守らねばならない大きな役割がありますよね。大人

が大人としてできるだけ確かに存在し、それによって、もれなく子どもに健康と希望を託す。絶対にその大人らしさは必要です。

でも、それが枷かせとなって大人の人生の根本を揺るがしては本末転倒です。大人は全員かつての子どもであり、子どもだった私たちの希望として今の私たちがいるならば、大人はかがやく星でありたい。

ところで、うちは子どもが高校生と中学生で、ふたりとも大きくなりました。もはやふたりのほうが体は私よりも大きいです。

金銭面や安全面、教育面など庇護せねばならない部分はもちろんありますが、ふたりともそれぞれに独自の価値観や感性を身につけてじわじわ人として成っていつているなど思われます。

そうした過程で、どこか私はわざと子どもっぽく（というより、頼りなく、ですかね）振る舞うことがあって、たとえばふたりよりも早く寝るとか、ジャムの瓶を開けるのを早々に諦めて頼むとか、そういうところです。スナック菓子を率先して食べたがったり。

子どもが育ったから、私は少し頼りなくしてみようというシミュレーションがどこかで働いている気がします。

これって一見、誰かをもっと頼りにしたい、ケアされたい欲が立ち上がっているように見えて、実は大人らしさを自分のなかで懷疑して解体しようとしているんじゃないかという気がするんです。

子どもが育って、彼らをがちがちに守らなくてもよくなった。その余裕でもって、自分のどこに大人としての枷がはまっているかを探して外そうとしているんじゃないかと。

試行錯誤して人としてのちよいどいい態度や感情の出し方を探っているような感じですか。そして、結局それって子育て中だっただけでずっとそうだったし、すべての大人が無意識にやっている逡巡のような気もするんです。

めっちゃくちゃとりとめなくなっちゃった！

ナオさんも春は怖いですか？ 大人らしさや、そこに付随する感情の抑制や発露について考えていることはありますか？ お聞かせいただけたらうれしいです。

春におびやかされたら、鼻をつまんでください。においがかがず景色だけを見ると映画のようです。

古賀及子

自分が今どれぐらい大きな声を出せるのか試したい

2024年4月2日

古賀さん、こんにちは！

スズキナオです。お返事が遅くなってすみません！

古賀さんからいただいたお手紙の中に、春がいよいよ来るぞという兆し書き留められていましたが、それから3週間近く経って、もう、しっかりと春です。

私が住んでいる大阪の桜ノ宮という街は、そんな地名がついているほどで、桜の名所なんです。大川という川の流れに沿って桜並木の遊歩道が長く続いていて、見頃になるとたくさんの人が花見をしに来ます。

普段はこれといって何もない街で、JR桜ノ宮駅という最寄り駅の駅前もめちゃく

ちや静か。近くに住んでいる人か、総合医療センターという大きな病院に用がある人ぐらいしかこの駅で降りることがないんじゃないかという、そんな場所（私はそこも含めて気に入っているのですが）。それが、桜が咲いている季節は人で溢れ、コンビニのトイレに行列ができたりする。桜の力はすごいです。

満開の桜並木を眺めるのは私も楽しみです。その一方で、季節の変化が年々苦手になってきている気がします。桜なんか、まさにそうですが、あの「もうすぐ終わってしまう」という感じがすごくさびしくて仕方ないんです。桜もそうだし、5月頃の気持ちのいい気候とか、秋の、ようやく日差しが優しくなってきたてちょうどいい頃とか、あまりに一瞬で過ぎ去ってしまう。

40代も半ばとなり、それが一瞬であることを何度も経験してきたからさすがに身に沁みて、「ああ、この良さもすぐ去ってしまう」とばかり考えてしまつて。古賀さんがこの往復書簡に誘ってくださったきっかけの「さみしさ」もこれに近いものでしょうか。

私の両親は山形生まれで、幼い頃から私もよく実家に連れられていき、そこで親戚

たちに可愛がってもらったので、今もずっと山形が好きなんです。それもあり、テレビで山形が取り上げられているならできるだけ見たいというスタンスでおります。

先日、そのようにして山形が映るテレビをぼーっと見ていたのですが、ひな祭りの立派なひな飾りが出てきて、そういえば山形のひな祭りはすごく華やかなんです。以前、親戚に車で連れて行ってもらったことがあるのですが、大きなお屋敷で昔から大事にされてきたらしいひな飾りが一般向けにも公開されていて、そういうお屋敷があちこちにあって。その当時、たしか私は10代だったと思うのですが、正直なところ、ひな人形を見てエキサイトするということもなく、「へー、ずいぶん賑やかな飾りだ」という程度にしか思わなかったのですが、連れて行ってもらってそれを見たことは今もはっきり覚えています。

テレビの中で出演者の一人が「山形のひな祭りは、なんでこんなに力が入っているんでしょうか」というような質問をしていました。それに対して地元の方が「山形は雪が降って冬がとにかく長いんです。だから春が本当に待ち遠しいんです」と言っていて、そうか、と思いました。あれは春を迎えることができたお祝いでもあったのか。

うちの母も、山形に春が来た時の喜びについてよく語ってくれた気がします。雪の下から草花が芽吹いて、それはもう、全身の細胞がくまなく嬉しいような、踊り出したくなるような感じなのだそうです。もちろん、豪華なひな飾りを用意できたのは裕福な家だけだったのかもしれないけど、どここの家の人でも、きっと春の訪れにはそれぞれに色めき立つものがあっただと思います。

「踊り出したくなるような」と自分で書いてみて、〃母が小躍りしている場面〃をふと思い出しました。子どもの頃、母が冗談を言って少し体を揺らして踊ったことがあって、私はたぶん高校生ぐらい、だとしたら二人の妹は中学生か、おおよそそれぐらいの年の子どもたちがそれを見て、なんだか大げさなぐらいに笑った記憶があります。というのは、母は小躍りするような人ではないんです。真面目な人というのもないけど、いつもおっとりしていて、体を躍動させるような人ではない。だから母が機敏に動いただけで子どもたちは驚いて、（たぶんうれしくて）大笑いしてしまったんだと思います。

子どもの私たちが知らないだけで、母の体にも当然、躍動する力がある。若い頃は

ボウリングをしていて結構上手だったというし、何かがうれしくてピョンピョン飛び跳ねたこともあったでしょう。同じように、声をあげて激しく泣いたことも、大声で叫んだことだってあったかもしれない。年齢を重ねるにつれ、そういう激しい感情を押し込めるようになるんでしょうか。子どもの前ではできるだけ感情的にならないよう、私もやはり気をつけているし、それは母も同じだったでしょう。

生々しい感情が遠ざかっていくような、そういう寂しさが大人にはある気がします。それは古賀さんが先日のトークイベントについてのくだりで書いてくださった、恋の話ともつながってくるかもしれません。誰かに強く惹かれていた状態とか、誰かに求められているという実感とか、そこに自分が自分として生きている確かな感触が宿るというか。

私たちは感情をコントロールする訓練を積み重ね過ぎてきたのかもしれないです。だからどうにも抑制が利かないような状態にやけに惹かれてしまうのかもしれない。小躍りしたい、自分が今どれぐらい大きな声を出せるのか試したい、本気でジャンプしたら小川ぐらい飛び越えられるのか、試したい。

と、書いておきながら、自分はいま大人になり切れていない方じゃないかとも思っています。鏡の前に立たない限り、自分の視界には自分はいないですね。そういう、自分が見えてない時に自分が自分に対して思い浮かべるイメージ像って、私は20歳ぐらいから変わってない気がします。若い気がしているというか、歳を取ったことに気が付いていない。少なくともこの視界には、あの頃より歳をとった自分はいませんから。まあ、老眼で小さい字が読めないとかはあるんですが。

目の前にはいつも若い気分のままの視野があって、たまに鏡に映る自分を確認しては「大人らしく振る舞わない」と自分を戒める。その行為を繰り返している気がします。

トークイベントの日、先に古賀さんは会場に着いていて、後から来る私に「ポッキーを買ってきてください」とリクエストがあって、駅のすぐそばにスーパーがあったし、ポッキーはどこにでも売っているからすぐに買って、それを持って行ったら「そうそう、これです!」と喜ばれました。

簡単にできることで喜んでもらえるのは、すごく得な話です。誰かの役に立てた瞬

間も、生きる喜びですね。会計の時に端数分の小銭を出せたとか、家の近所で道を聞かれて完璧に教えられたとか。初心者向けの善行とか。善行入門編。ああいうものならいくらでもやりたいです。

古賀さんのお手紙への答えになっていたでしょうか。古賀さんは、自分の感情とどうつきあっていますか？

スズキナオ